

# ポスト・アパルトヘイト時代の 南アフリカ共和国における若者黒人音楽の役割

——Kwaito 音楽を中心に——

## 要旨

氏名：三藤弘太郎

南アフリカ共和国（以下、南ア）は 1994 年の黒人差別的なアパルトヘイト政策廃止後に「虹の国」実現を目指してきたが、決して順調とはいえず、特に南アの若者黒人には厳しい社会情勢が続いている。本研究の目的は、過去のアパルトヘイト政策の負の遺産を払拭しようとする南ア社会において、黒人由来の若者音楽文化が果たす役割を考察することである。第一章では第二章以降の分析パートに移る前に、前提確認として南ア社会の実情や黒人音楽文化と南ア社会の関係性を概観した。

本研究の分析では主に毛利（2017）で紹介されているアフターミュージックの概念を参考にし、ポスト・アパルトヘイト時代の南アから世界へ羽ばたいた Kwaito 音楽に注目することで、この南アを代表する音楽が社会、そして人々にとってどのような役割を担っているかを考察した。分析パートは二つに分かれている。第二章では Kwaito の発展過程に注目し、要因を考察することを通して、Kwaito が担う南ア社会における役割をマクロ的に捉えようと試みた。また、第三章では視点を音楽の担い手であるアーティストに切り替え、彼らの発言を考察する疑似的なフィールドワークを通して、Kwaito とそれに続く南ア電子音楽がアーティスト個人にとってどのような存在である

のかを捉えようと試みた。

第二章の分析からわかったことは、まず特異な成立背景から新時代における象徴的な位置づけを獲得した **Kwaito** は、長きにわたった苦難をようやく乗り越えた南ア社会と黒人にとって必然的に極めて重要な存在になったということである。そして、その特異性が経済的・社会的ポテンシャルを生む好循環を形成したことと、それに注目した様々な主体による後押しが活発化したため、社会のあらゆる場面での活用が進み、結果としてポスト・アパルトヘイト時代の南ア社会とは切り離せない存在となったことが確認された（第二章）。

第三章の分析からわかったことは、音楽の担い手の立場からすると、このような影響力の大きい音楽は自分たちの思いを世界へ届けるための重要な手段となっていたことである。また、全体的な傾向として **Kwaito** 最盛期のアーティストと **Kwaito** の流れを汲む近年の若者アーティストとの間に、音楽活動における意識や目的の違いも確認された。無論、各アーティストの考えや思いは全体的な傾向と必ずしも一致するわけではないが、少なくともこれらの音楽は、各個人が夢や理想の状況へ近づくための手段としての役割を担っていることが示唆された（第三章）。